

母塾

VOI-29

2019-11-12



新小岩幼稚園・未就園児クラス

illustrated by Kurumi

『 整理しすぎない 』

アドバイザー 猪之鼻晴子

前回の「片づける」ということを未就園児グループのママたちと話した。片づけが好きなママ、片づけが苦手なママ。いろいろなエピソードが出た。子どもの物を捨てようとするものすごい抵抗に会うという。他人に自分の物を処分されるというのは、非常にイヤなことだ。処分する側は善意でやっけていても、自分の所有物を片づけられるというのは、その持ち主のことも否定していることになる。

我が家の「片づけ屋さん」の長女が高校生の次男の古いシャツを捨ててしまったら、次男は慌ててゴミ袋を漁って探していた。彼にとっては、アルバイトで自分で買った記念のシャツらしい。「このオモチャ、もういいよね」と言うと、4才児は「あ、それ今遊ぶの。」と遊び出す。家族でも勝手に物を処分できない。持ち主が「もう卒業」と納得しないと物とは別れられない。ひとりのママが「私の物も誰かに捨てられたら怒る。だから家族の物はその子に任せる。」と言っていた。「片づけることよりも、家族が仲良くやっていく方が大事だと思う。」と。本当にそうだな、とハツとする。

今は世の中「片づけ」ブームでSNSでは綺麗に整理整頓された部屋が称賛される。綺麗に片付いた部屋は快適だし、物を処分するのは爽快だ。でも、子どもから見たらどうなのだろう、と考えてみた。子どもは「ママ、少し片づけたら？」とは言わない。気にも留めていない。それよりも、「片づけなさい」と毎日言われたり、自分のオモチャが勝手になくなっていることがイヤなのだ。「もっと何か遊べるものないかな。」「これも何かに使えないかな。」と出来ることなら、家中の物をすべて使って遊びたいのだ。整理整頓するというのは、物事を効率的に進めるための作業だ。子どもは、効率的とは真逆の非効率で生きている。ムダな動作・ムダな物の数々が子どもを成長させている。整理され過ぎた環境は大人が作ったものなので、子どもが何かを作るスキがないのだ。大人から与えられたオモチャだけでは、創造する力は生まれないのだと思う。4才児はキレイ好きのおばあちゃんの家では時間を持て余す。「ねえ、新聞紙ちょうだい。あと輪ゴムと割りばし。」「さっき、拾ってきた落ち葉と石に水も入れるから。ビニール袋も。」と言って嫌がられている。「買ってあげたオモチャで遊びなさいよ。」と言われると「葉っぱがオモチャだよ。」と言う。大人が定義するオモチャとは限定的で、子どものオモチャは無限なのだ。

もうひとりのママは子どもの引き出しの飴玉のゴミが溜まっていたから捨ててあげようとしたら「それでロケット作るから大事に貯めているんだよ。」と言われたという。大人にとってはゴミに見えても、子どもにとってゴミはない。すべての物が宝になりえる物なのだ。片づけたいのは私なのだ。義務ではない。あまり自分にも家族にも厳しく課すことはないと思う。考えたら私たちは「子どもを育てる」という一番非効率なことをしている真っ最中だ。仕事のように何事も効率的に短時間で、「さっさと済ませる。」ということとは違う。雑多な一見ムダに見えることの中にこそ、子どもとの発見があるのではないか。「今日は若いママに交じってリレーをして疲れたから、片づけ後回しね。」の言い訳かもしれない。

harukoinohana1717@gmail.com